

## 石川啄木の「洪民日記」と「林中日記」

河野 仁 昭

盛岡での新婚生活が経済的にゆきづまった石川啄木が、妻の節子と母カツを伴って洪民村へ帰るのは、明治三十九年三月四日である。父一禎は一家の窮状をみかねて、青森県野辺地の師僧のもとへ身を寄せていたし、妹光子は盛岡女学校の女教師に託した。

帰村した日からその年末にかけて綴られた啄木の「洪民日記」は、彼の代用教員生活や初めての小説らしい小説の執筆、村での生活意識などが如実にかがえて興味ぶかい。それだけでなく、当時の彼の思想や文学観、教育観なども克明に記されているので、かなり多面的にこの時期の啄木を知ることができる。

この日記が収録されている『石川啄木全集 第五卷』（筑摩書房、昭和五十三年四月）の巻末につけられた岩城之徳の「解説」によると、これは洋綴罫ノートが用いられており、表紙はMY OWN BOOK FROM MARCH, 4, 1906, SHIBU-TAMIとなっており、本文の冒頭に「洪民日記」と記されている。「ノートには二十枚切

断の痕がある」と「解説」にあるのだが、それによって本文がそこなわれているというのではなさそうである。

「洪民日記」の直前の日記は、明治三十七年一月一日から四月八日、同年七月二十一日から二十七日までについて記した「甲辰詩程」（右の全集の同じ巻に収録）である。だから、この後に続く詩集出版を目的での二度目の上京、父親の宗費滞納による任職罷免と一家の宝徳寺退去、翌三十八年の結婚と雑誌『小天地』発行を含む盛岡での新婚生活、経済的破綻など重要な事件や問題は、日記からは知ることができない。日記は書かれたのか否かも詳らかでない。

それはともかく、この「洪民日記」は、たんなる日録ではなく、少なくとも当初は、文学的な作品に仕立てようとする意図さえもっていたにちがいないと思われる。そうした傾向はそれ以前にも見られなくはないが、より顕著なのである。この日記を初めて口語体にしたのも、そのことと無関係ではないかもしれない。冒頭の三月四日

の項を、彼は次のように書き起こす。

「九カ月間の杜陵生活は昨日に終りを告げて、なつかしき故山洪民村に於ける我が新生活はこの日から始まる。

洪民は、家並百戸にも満たぬ、極く不慣れた、共に詩を談ずる友の殆んど無い、自然の風致の優れた外には何一つ取柄の無い野人の巢で、みちのくの広野の中の一寒村である」

これはいわば舞台設定だといつてよいが、記載者のための私的な記録であることを第一要件とするはずの日記を、普通、このような記述から始めるものであろうか。熟知している洪民村の説明など、啄木自身にとっては不要のはずなのだ。

「我が新生活」ではなく、「我が新生活」がこの日から始まるという表現にも注意をひかれる。端的にいってしまえば、当時の啄木にとっては、いかに窮迫しようと生活への関心は従であり、主たる関心は詩ないしは文学にあった。「詩人たる自分の学べき大学が、塵の都のいかめしい大建築であるとは思へない。故郷は、いはゞ、神が特別の恩寵を以て自分の為に建てられた自然の大殿堂である」と、記述は、彼の内面に及んでくる。経済的な生活にゆきづまり、尾羽うち枯らした廢残の身を故郷にさらすことは、いかに窮迫の末とはいえ、自負心のつよい啄木はもちろん、プライドの高い母カツも耐えがたかつたであろうことは想像にかたくない。そうした啄木

とかれの母親が自らを納得せしめる唯一のものは、啄木の詩であり文学であった。ほどなく代用教員の職をえて矜持を保ちうるようになるのだが、帰郷当初は詩以外になにもなかった。「洪民日記」が文学的になるのは理由のないことではなく、その意識が、以後一年余の洪民生活を規定することにもなる。

この「洪民日記」のほかに、同じ明治三十九年三月四日から三月二十七日までの間について記した「林中日記」（同右全集、第六巻に収録）というのがある。これは発表を目的として書き改めたもので、各日を一章あるいは一節として番号をつけ、三月二十七日の項が「十七」になっている。また「洪民日記」の三月二十七日の項の冒頭から五分の一あたりのパラグラフの終りの部分の欄外には、「林中日記（マツ十八）こゝまで（四十九枚）」と書き込みがあるという。「十八」は章番号であり、「林中日記」はここで終っているのである。さらに「洪民日記」の「十二月中」の項の「七日」のパラグラフに続く記述の途中に、「この日記を訂正して、『林中日記』と題し（其一）五十枚許り『明星』へ送った。あ、予の『我が懺悔』!!!」と書かれている。

私は市立函館図書館啄木文庫に保管されているという「洪民日記」の原本を見ていないので確かなことはわからないのだが、「林中日記」に関する以上の二項は、おそらく後日に書き加えたもので

あろう。私にはこの日記が、「洪民日記」からの抄出にはちがいないけれども、書かれたのはかなり後であろうと思えてならないのである。岩城之徳は「林中日記」の「解題」（同右全集、第五巻）で、「洪民日記」の「五十頁目明治三十九年三月二十七日の記事の欄外右端に、『林中日記（十八）こ、まで（四十九枚）』と記入されているので、この時期に執筆されたものと思われる」という。あるいはそのとおりかも知れないのだが、その「欄外右端」の記入は確かにこの時期のものだという裏付けはおそらくあるまい。岩城はふれていないが、仮に右の「十二月中」の記載に従って、三十九年十二月に書かれたのだとすれば、それがなぜ『明星』に掲載されなかったのか疑問がのこる。もし返送されるなり然るべき理由で掲載保留になったのだとすれば、翌年一月一日に記述が始まる「明治四十丁未歳日誌」に啄木はなにか書きそうなのだが、関係のありそうな記事は見られない。また「洪民日記」ころの啄木が「あ、子の『我が懺悔』!!!」などと書きそうには思えないのである。「洪民日記」のコンテキストから見てのことで、これはかなり重要な問題を含んでいる。

私がかかわるのは、「洪民日記」と「林中日記」は、後者が前者の抄写であるにかかわらず、両者の記述に極めて顕著なちがいがあるためである。それも肝心と思われる記述に歴然たるちがいが認め

られる。

表現の修正や、さほど重要とは考えられない記事の削除などを逐一とりあげるとまはないし、その必要もないことであろう。だからそうしたことは省きたい。肝心な問題の一つは、「詩」もしくは「詩人」に関する記述が、「林中日記」にはほとんど見られないことである。

まず三月四日の項には、「愛と詩と煩悶と自負と涙と、及び故郷と、これは実に今迄の、又現在の、自分の内的生活の全部では無いか」といった部分や、先に引用した「詩人たる自分の学ぶべき大学」といった記述が「洪民日記」にはあった。これが「故郷」に関する記事とともに「林中日記」では完全に削除されている。「林中日記」は比較的客観的に書かれているのである。

ついで「洪民日記」の三月九日の項には、次のような記述があった。

「世の中で頭腦の貧しい人だけが、幸福に暮らして居る。（中略）その代り、朝生暮死の虫けらと同じく、彼等の生活には詩がない。詩のない幸福！ あ、若し自分が一瞬たりとも彼等の平安を羨ましいと思ふ事があるなら、それは自分に取って最大の侮辱である。

（中略）自分は心の富のために不断に戦ひ、苦しみ、泣かねばならぬ運命を荷って居る。（中略）あ、永久の不幸！ 生ける詩の生

活！ 絶痛なる生命の音楽をきく思ひがする」

これが、「林中日記」では次のように改められている。記述も簡略になっている。

「人間の中の枯れた木の木の葉とは、頭脳に血の足らない人の事である。一生脳溢血に罹る心配のない人の事である。彼等は、空腹の時と、春画を見る時と、酒の香を嗅ぐ時と、新聞の講談を読む時の外は、一切物に感ずる事無し。(中略)

噫、若し自分が、一瞬たりとも彼等の平安を羨ましいと思ふ事があるなら、それは、自分で自分に最大の侮辱を与ふるものである。」

両者が同じ文章になっている部分は、「矢張り自分の靈魂はたゞ、戦闘と不幸の空気の中にのみ生活する事が出来るのだ」くらいだといつてよい。この部分も「詩」が重要な意味をもっている。「洪民日記」と、それが削除されている「林中日記」では、ニュアンスがかなりちがう。ちなみに、こうした記述を終えたあと、彼はパラグラフを改めて、「月下、井オリンを弾き乍ら(小学校から)帰って来て」といった、村人に異状の感を与えたであろうと思われる行為の記事や、「自分はまだ何事をもしない。(中略)神は事業の前に休息を与へたのであらう」といった「洪民日記」の記述を削っている。

「林中日記」は三月二十七日で終わっているので当然含まれないのだが、「洪民日記」の四月九日の項に、啄木は次のように記すこと

になるのである。

「現実の世界は遂に詩の世界ではない。そして美の神はミケランゼロの昔から矢張り妬みの神である。されば、詩人が同時に普通の人間たる事は、殆んど不可能の事である。

普通の人間は人間と共に居り、詩人は神と共に居る。

詩人は一ケの狂人である。狂人に対して普通の人間扱ひをするのが世人の抑々の誤謬であるのだ。人は何故自分を狂人として取扱ぬのか、これが自分をして常に不快の児たらしむる唯一の原因ではないか。

人は人の世界に居れ、詩人は詩人の世界、乃ち孤独の世界——美の世界、神の世界、——に居らねばならぬのだ。

火と水を同じ器に入れやうとしたのが、世人の抑々の誤りで、又自分自身の誤りであつた。馴鹿は矢張り北極光の光りの照る国でなくては育たぬ」

やがて、「詩人たる資格は三つある。詩人は先第一に「人」でなければならぬ。第二に「人」でなければならぬ。第三に「人」でなければならぬ」(「食ふべき詩」明治四十二年十二月)と一八〇度の転換をすることになる啄木だが、「洪民日記」時代の彼は、「自分は詩人である」(四月七日の項)と肩肘張って洪民の小村落を闊歩し、村びとの多くの響聲をかつていたのである。この自負や態度は、先

の「洪民日記」三月九日の記述と別のものではありえないし、一年余の洪民時代にはほぼ一貫していたといつてよい。にもかかわらず「林中日記」にそれが見られないということは、まだ結論めいたことをいう段階ではないけれども、これが書かれた時期には、詩人であることの自意識、ないしは詩人や詩に対する評価に、かなり明確な変化が生じていたことを意味する。少なくともそう解釈しなければ不自然ではないかと思われる。

その「林中日記」にも、詩人が顔を出すことが全くないわけではない。最も顕著なのは三月八日の項で、「洪民日記」と同様「詩人は人類の教師である」と明記している。ただし、「林中日記」ではその語は二重のカギカッコでくくられている。

啄木の教育観については拙著『石川啄木——孤独の愛』（洋々社、一九八六年四月）に詳述したので、詳細はそのほうにゆずりたい。

彼が「林中日記」に次のように書いている点に関するかぎり、「洪民日記」との間に大きな違いはないのである。

「詩乃至一汎芸術が教育の奴隷ではない。寧ろ教育こそ、芸術のうちの一含蓄といふべきである。此人間教化の要求が、芸術の内容と分離して、實際的に、直接的になり、初めて普通の所謂教育なるものが存在する。

芸術の内容——生命、と分離したものであるから、教育それ自身

は、本来空虚である、死物である、残骸である。唯、芸術の内容の代りに、教ふる人の人格と結びついて、初めて充実し、生命を得、効果ある真の教育と成る」

彼はさらに、「教育が本来人間と密接であるに反して、芸術は寧ろに神に近い」と、これも「洪民日記」と同様のことを書き添えている。この後が両者は微妙にちがっている。「洪民日記」では、「善悪は相対的評価で、真と美とは絶対的存在である」と書き、教育が教えるのは「善」だが、芸術が教えるところは「善——道德以上に、真と美とである」と結論づけている。

これに対して「林中日記」では、「芸術創作に三個の条件がある」として、

「第一の条件は、『美』である。

第二の条件は、矢張『美』である。

第三の条件は、亦矢張『美』である。」

と、芸術の条件や目的を説明し、さらに、こうした条件を備えた芸術からは「虚偽」がつくられるはずがないのだから、「芸術の真境地は美にして且つ真」だとし、その「芸術の内容は人生なり。芸術は人生の内容なり」とやや飛躍した結論を導き出す。そして、「人類最高の教育は芸術である」と、彼はいう。

こうした説明は「洪民日記」にはなかった。しかし両者の間に基

本的なちがいはいはないといつてよい。決定的な相違点は、「林中日記」のこの項の最後に、次のようにつけ加えていることである。

「予は今、(中略)『教育も亦一の芸術なり』と切言する。この言を能く領解する人は、恐らく真の教育者か、然らずんば真の芸術家であらう。然し此言を吐く予自身は、真の教育家でも真の芸術家でもない。予は唯予である」

「洪民日記」では、自分は詩人であり、従つて日本一の代用教員だと自負していたのであった。

この点を除いて両者の内容はほぼ同じだとはいうものの、看過しがたい微妙なちがいがある。その一つが「洪民日記」の次の記述が、「林中日記」では全面的に削除されている点である。

「教育も、その結合したる人格によつて神に近づくに従ひ、何らかの芸術的形式を備へる様になる。千古の大教育者クリストの一生は渾然たる大詩篇を成して居るではないか」

いささか神憑りめいているが、この時期の啄木は、生涯のうちでもっとも宗教に接近していたのである。クリスト教に接近していた、といつてしまつてもよいだろう(前掲拙著、参照)。彼が「林中日記」を途中で止めている三月二十七日の項の後半には、催眠術と関連づけてクリストの奇跡がかなり詳しく記載されているのである。

啄木は「大基督を初め古来幾多の予言者等の驚くべき奇蹟」を、決して「荒唐無稽の附会説ではなくて、實際あつた事、且つあり得べき事」だと肯定している。そして、たとえば次のように書いてさえているのである。

「基督はガラリヤの海で水上を歩いて弟子達の乗つて居る舟に上つたと聖書に記されて居る。水上は愚かな事、自分は或時機までこの術を修練したなら、空中を歩いて岩手山に登る事も必ず出来うると信ずる」

こうした奇跡に関する記述の前に、「古人の教育は偉人を生み、今人の教育は、天才を殺して平凡なる人形を作つて居る」と、やがて「林中書」(明治四十年三月)で展開することになる天才主義教育をうかがわせる記述がみられる。

これらの記事の直前で「林中日記」が終っているのは、全面的な削除を意味するのでなければ、記事の扱いに当惑したためであろう。「林中日記」にも「真と美の充実したる世界は唯神の創め給へる世界のみである」(三月八日の項)などのほか、神といふことは数カ所みえる。けれども、右の記事を除いてクリスト教の神だと解釈しうるような叙述は、注意ぶかく避けているように思われる。クリスト教といふことは全く使つてもいない。

「洪民日記」三月五日の項に、「午後女教師上野さめ子女史が来た。

熱心なクリスト教信者である。自分は、我等が神人クリストに就いて思ふうちで、クリストも亦人間であつたと思ふ程力と慰めを与へる事はない、と語つた」と記しているが、「林中日記」では全面的に削除している。

また「林中日記」の最後、三月十七日の項に、「朝起きる、机の上には硯と紙と古雑誌許り」と記している部分の前に、「洪民日記」では、「蔵書と云つては、自分の『あこがれ』と、古雑誌が二三冊と、その外に売り残した二三部の詩集、新約全書位なもの」とあつた。これも削除されている。

「洪民日記」三月十三日の項には、妻子のある男にだまされて私生児を生んだ女性が、彼女の家族から迫害を受けているという話をきいて、日記の中で彼女を擁護する記述がある。「実に残酷な話ではないか。純潔な処女の心身を弄んだ男にこそ罪はあれ、彼女の恋に何の罪があらう。否、彼女に罪がないばかりでなく、人生第一の不幸に会した彼女こそ当然深い同情を寄せられるべき資格があるのではないか」と啄木は書き、さらに「結婚について神の定められた法律はたゞ一條ある。曰く、愛！ されば、すべての孩提は皆ひとしく神より出たる愛の分身である」と述べるのである。もし母親が不倫の色欲のために誤つて子を生んだとしても、子にはなんの罪もないので、「神の前に於ては世に私生児という擯斥さるべきも

のは一人も無い」とも書いている。

上田哲が「啄木のクリスト体験（『啄木研究』第六号）で指摘しているように、右の叙述は『新約聖書』の「マルコ伝」第十章十三―十六、「ヨハネ伝」第八章三―十一などを念頭においてのものとしてよいだろう。ここでは「神の国」は幼子わかごのような者の国であり、「凡そ幼児の如く神の国をうくる者ならずば、之に入るに能はず」（マルコ伝、第十章十四―十五）と説かれており、「ヨハネ伝」では奸淫した女を罰する資格があるのは「罪なき者」のみだとして、女の罪を問わずに「この後ふたたび罪を犯すな」といつて去らせている。

「林中日記」の同じ日の項にも似通つたことが記されているが、このほうは人間の性の自然と、その自然を抑圧する「道徳」に主眼をおいた記述になっている。「今人の道徳は、一種の消火器である。――神の火蓋の滴りの、人の胸に燃えて居る香りと輝きを消して了ふ」ものだと、神が人間に与えたものと人間の性情の自然をほぼイコールのものとしてとらえている。これは「洪民日記」では「愛」の問題として書かれたはずのものである。彼はさらに、「林中日記」に次のように書くのだが、この部分は「洪民日記」にはない。「然し能く考えて見よ、匂深き朧月夜の次に清清しき曙の光が来る。この曙は、然し、一時間と続くものではない。垂いで来るもの

は日だ、熾烈の日だ。心と心との契のみを、「生ける人間」に強ひるのは、其残酷道德に似たりといふべしである」

「洪民日記」の先の記述がもし『新約聖書』を念頭においてのもではなかったにしても、しかし、『新約聖書』的である事実是否定すべくもない。それに反して「林中日記」では、そうした要素をほぼ完全に払拭しているのである。

二つの日記の相違は、個人主義や社会主義に関する記述のほかいくつかあげられるが、紙幅の関係もあることなので、あとは「林中日記」では完全に削除されている「洪民日記」の三月二十日の項の一部をあげるにとどめたい。この日の記述は「洪民日記」中では長文に属する。削除されているのは彼のいわゆる「一元両面の哲学」である。この年の一月十八日付の小笠原謙吉あての手紙に、いわばその着想とでもいふべきことを記した啄木は、右の日記で詳細にその論を展開することによって、満足すべき結論をえたのである。その論理は、要約すれば次のようになる。(詳しくは前掲の拙著参照)

宇宙の根本を「絶対意志」に帰したのはシヨウベンハウエルの卓見であった。だが、彼はその意志の拡張が人間に不幸をもたらすと見て、その意志を消滅せしめるところに「自他融合」の幸福の道を見出した。これをキリスト教信仰にもとづいて敷衍したのがトルス

トイである。

啄木はここで、シヨウベンハウエルには論理上誤謬があるという。「意志消滅」はただ「虚無あるのみ」ではないかと。

シヨウベンハウエルの「同情と弱者との道德」に対して、ニーチェは、「人生の真諦は意志拡張、自己発展にありとする個人主義」を立て、個人の「権威と強者との道德」を押し通した。

この相反する二者の思想のそれぞれ一端をとらえて、「消極性の愛の陰電気」と「積極性の意志の強電気」を合して、「意志拡張の愛」の世界観を楽詩に現わしたのはワグネルであると位置づける。

これは姉崎嘲風がかつてドイツでワグネルの楽劇に接して書き送った「高山樗牛に答ふる書」(『太陽』明治三十五年二月三月)その他を下敷きにしたものである。樗牛はワグネルを、「意志消滅の愛より、転じて意志拡張の愛」に進んだものとして評価する一方、自他融合の道がないとしてニーチェを批判した。

啄木は樗牛の見解をほぼ全面的に承認しながらも、そのワグネルについては「意志根本の世界と愛との関係」「意志の世界と愛の関係」が不明瞭だとする。彼はニーチェの「意志拡張」の「個人主義」に強く共感していたのである。一方、トルストイのキリスト教的な「愛」にも共鳴を覚えるに至っていた彼は、「愛を自他融合の意志」と解釈することによって一切の問題が永解したというのだ。

「宇宙の根本」は「意志」である。その二元的世界の一方には、ニーチェにおける「自己発展」の側面があり、他の側面にトルストイ的な「自他融合」の「愛」がある。「この一解あって、自分の二十年間の精神的生活が初めて意義あるものとなった。この一解が乃ち自分の今迄に於ける最大の事業である」と、啄木は大いに満足している。

彼を得意にさせたこの「一元両面の哲学」は、翌四十年九月、札幌の『北門新報』に掲げた「綱島梁川氏を弔ふ」あたりまでは、ほとんど変容することがなかったといつてよい。変わってくるのは四十年一月末から二カ月余の釧路時代である。同年二月八日付の宮崎郁雨あての手紙に、啄木は次のように書く。

「まだ誰にも発表した事はないけれども、僕一家の一元二面論で、何人の哲学にも優ると自信する哲学を案出して居る、然し乍ら君、何人か真の自由を得て自然の力以外に立ち得られよう、僕の個性論も、僕の一元二面観の哲学も、はた又、僕の一切の自負、将来に対する計画も、遂に矢張一種の生活幻像ライフイメーションではあるまいかと疑ふ事がある」

彼は、理想とか未来といったものは、本来「空」な存在である人間が、その実態を見まいとして抱く「生活幻像」だという。自然主義の影響と北海道生活が彼の思想に変化をもたらせたのであった。

右の手紙の中で、彼は次のようにもいっている。

「自他融合の意志と僕の名づくる『愛』はあるが、道徳は無い。既に霊肉の区別がなくなつて、勝手になれと虚無の宣告を受けた人間にとつては、万事唯勝手にやればよい」

「一元両面の哲学」はここで終つたのである。それは、ロマンチスト啄木の挫折であり、脱皮であつた。明治四十一年四月末に小説家を志して上京して以後の彼の日記や手紙には、そのことばが再び記されることはなかつた。

翌四十二年四月七日の「ローマ字日記」に、啄木は「予の文学は予の敵だ、そして予の哲学は予のみずからあざける論理にすぎぬ！」と書く。ここにいう「予の哲学」を「一元両面の哲学」だといつてしまふと問題が残るかもしれないが、彼が「予の哲学」と記したものは、それをおいて他になかつた事実を看過するわけにはいかまい。

いずれにせよ「林中日記」でこれが全面的に削除されているといふことは、少くとも釧路時代以前に「洪民日記」から抄写されたものとは考えがたい。先にあげたいいくつかの問題からみてもそうである。

啄木は古い日記を持ち歩いてきた。北海道から上京したときにさえそうであつた。おそらく手荷物として下げてきたのだろう。「明

治四十一年日誌」五月二十八日の項、すなわち上京してほぼ一カ月後に、彼は次のように書いている。

「古い日記を出して見て幾度も幾度も泣いた。死んだ姉！ 其子等！ あ、洪民！ 函館！ 小樽！ 泣くべき事が、かなしいかな、予の半生に極めて多い。父の事も泣いた、母の事も泣いた」

さらに、同年七月二十日には次のように書かれている。

「古い日誌を取出して、枕の上で読む。五行か十行読むと、もう悲しさが胸一杯に迫って来て、日誌を投げ出しては目を瞑った。こんな悲しい事があらうか。読んでは泣き、泣いては読み、これではならぬと立って卓子に向った」

この時期、啄木が古い日記をしばしば読み返している事実は注目されてよい。その日記を、発表しうるかたちに書き改めようと思えば、いくらでもできたのである。

彼は上京の目的どおり小説を書いていた。「菊池君」「病院の窓」「天鷲絨」「二筋の血」「刑余の叔父」など、いずれも短篇だが、七月初旬までにこれらの作品が書かれている。だが、売れなかつたのである。古い日記をひもといて悲しみをおぼえるのは、そのことと無関係ではあるまい。いずれも大なり小なり体験に依拠したこれらの作品が不成功に終った啄木が、いつそのこと古い日記そのものを作品に仕立て直すことを考えついたとしても不思議はなからう。お

そらくありうることである。

彼は「洪民日記」に、「林中日記」は「明星」へ送ったと書いているが、この記述には若干疑問がある。彼は「洪民日記」に記していた与謝野寛の名前や、「明星」が届いたといった記事を、「林中日記」では削っているのである。もし「明星」に掲載してもらつてもりであつたとしたら、おそらくそうはしなかつたであらうし、する必要もない。彼は原稿料が得られない「明星」ではなく、他の文芸雑誌が出版社へ送ったか、送る予定で「林中日記」を書いたとみたほうがよさそうに思う。

「林中日記」を啄木は次のように結んでいる。明治三十九年三月二十七日の項、つまり最後の「十七」章である。

「慙<sup>かぐ</sup>て再び目の覚めた時、脳める我魂は、嗚呼今日も亦、昨日と同じ様に夜が明けたのかと眩<sup>くら</sup>くのだ。噫<sup>こゝろ</sup>。

噫<sup>こゝろ</sup>這<sup>こゝろ</sup>魔<sup>こゝろ</sup>生活！ 這<sup>こゝろ</sup>魔<sup>こゝろ</sup>生活が何処にあらう。此生活から、側をはなれぬ恋妻と、故郷に在りと思ふ一念と、一切の追憶とを引き去つたならば、予は或は死なねばならぬかも知れぬ。

今日予は一時間一人泣いた。」

なるほど彼は「洪民日記」の同じ日に、貧窮について書いており、「精神の餓えた部分が、今迄に蓄へた養分をも喰つてしまふがために、自分は今詩をも小説をも書く氣に成れぬのではあるまいか」と

記している。

「林中日記」は右の記述で終わるのだが、「洪民日記」はこの日の右の記述につづけて、「自分は今、ギリシヤの古しへの文明を研究したいと思つて居る」と、かなり長文にわたつてギリシア文明と、それを源流とするヨーロッパ文明に思いをめぐらせるのである。

「死なねばならぬかも知れぬ」などという弱音は、「洪民日記」には見られない。彼は昂然としていた。「死」ということばが記されるのは「明治四十一年日誌」なのだ。たとえば六月二十九日の項には、「目をさますと、凄まじい雨、うつらうつらと枕の上で考へて、死にたくなつた。死といふ外に安けさを求める工夫はない様に思へる」と書かれており、七月二十三日の項には、「一日故山の事許り考へた。単純な生活が恋しい。何もかもいらぬ。唯故郷の山が恋しい。死にたい」と彼は書いている。先の「林中日記」の記述から「側をはなれぬ恋妻と、故郷に在りと思ふ一念」という部分を削れば、どうみてもこれは「明治四十一年日誌」のコンテキストのワン・パラグラフなのである。

さらに、「明治四十一年日誌」の、小説に行き詰まりを感じはじめた六月二十五日の項には、「頭がすっかり歌になつてゐる。何を見ても何を聞いても皆歌だ。この日夜の二時まで百四一首作つた。父母のことを歌ふ歌約四十首、泣きながら」と記されている。先に

引用した、古い日記をひもときながら泣いたという記事が思い出される。右の歌は翌日『明星』に送られるが、その中に次のような作品が含まれている。

父と母猶ましませり故に我死ぬを得ざりとまた筆をとる  
父母のあまり過ぎたる愛育にかく風狂の児となりしかな  
わが母は今日も我より送るべき為替を待ちて門に立つらむ

「林中日記」が「洪民日記」から大幅な改変を加えながら抄写されるのは、おそらく明治四十一年六月下旬以降であろう。その「林中日記」が私に興味ふかいは、二つの日記の間に啄木の変容がまざまざとうかがえる点であり、小説家にならうとしていたころの内的、思想的様相が垣間見られる点においてである。

#### 付 記

本稿提出後に、私は函館市立図書館で「洪民日記」の原本を閲覧する機会に恵まれた。しかし、本稿の大幅な訂正が必要とは思えなかつた。

なお、「林中日記」は『スバル』最終号（第五年第十二号、大正二年十二月）に、同人の平出修によつて発表された。これが初出である。